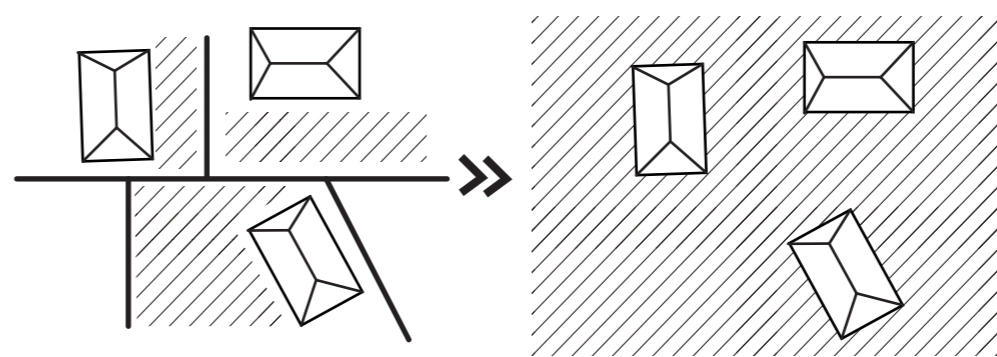


家串集落事前復興計画

みなでつくる「庭」のある暮らしの提案



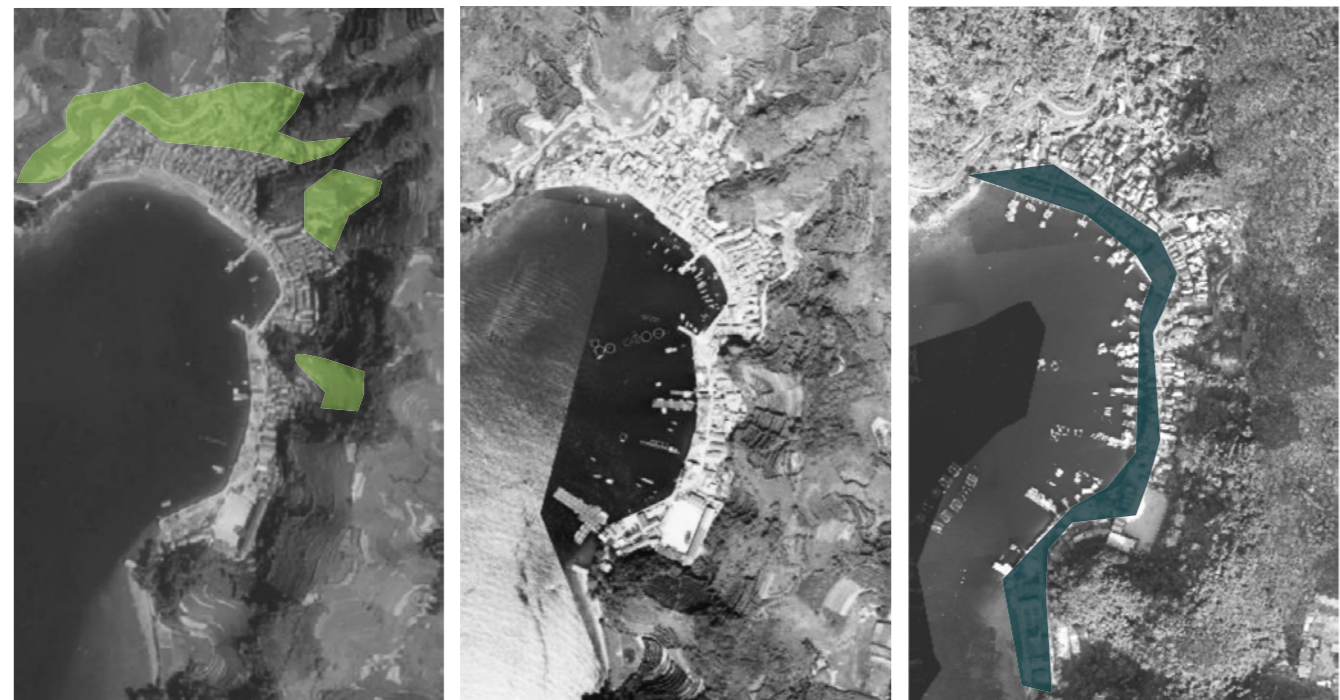
公有や私有ではなく、「総有」の考えにもとづいて集落の公共空間を共同管理する。集落全体で共同利用するこの公共空間は「道」や「空き地」ではなく、「庭」である。海から山まで、集落の「庭」が連続する、新たな漁村集落の形態を提案する。

BACKGROUND 南海トラフ地震にむけて



半島のなかでの家串集落
由良半島の集落は、1本の県道でつながっている。由良半島の付けに位置する家串集落は、半島と県の交通の結節点である。そのため、家串集落の復興は、半島全体に影響を与える。しかし、家串集落の大部分は津波浸水域にあり、県道の浸水は不可避である。地形的な特徴から、迅速な道路啓開を行うには、陸のみならず海からのアプローチも必要となる。

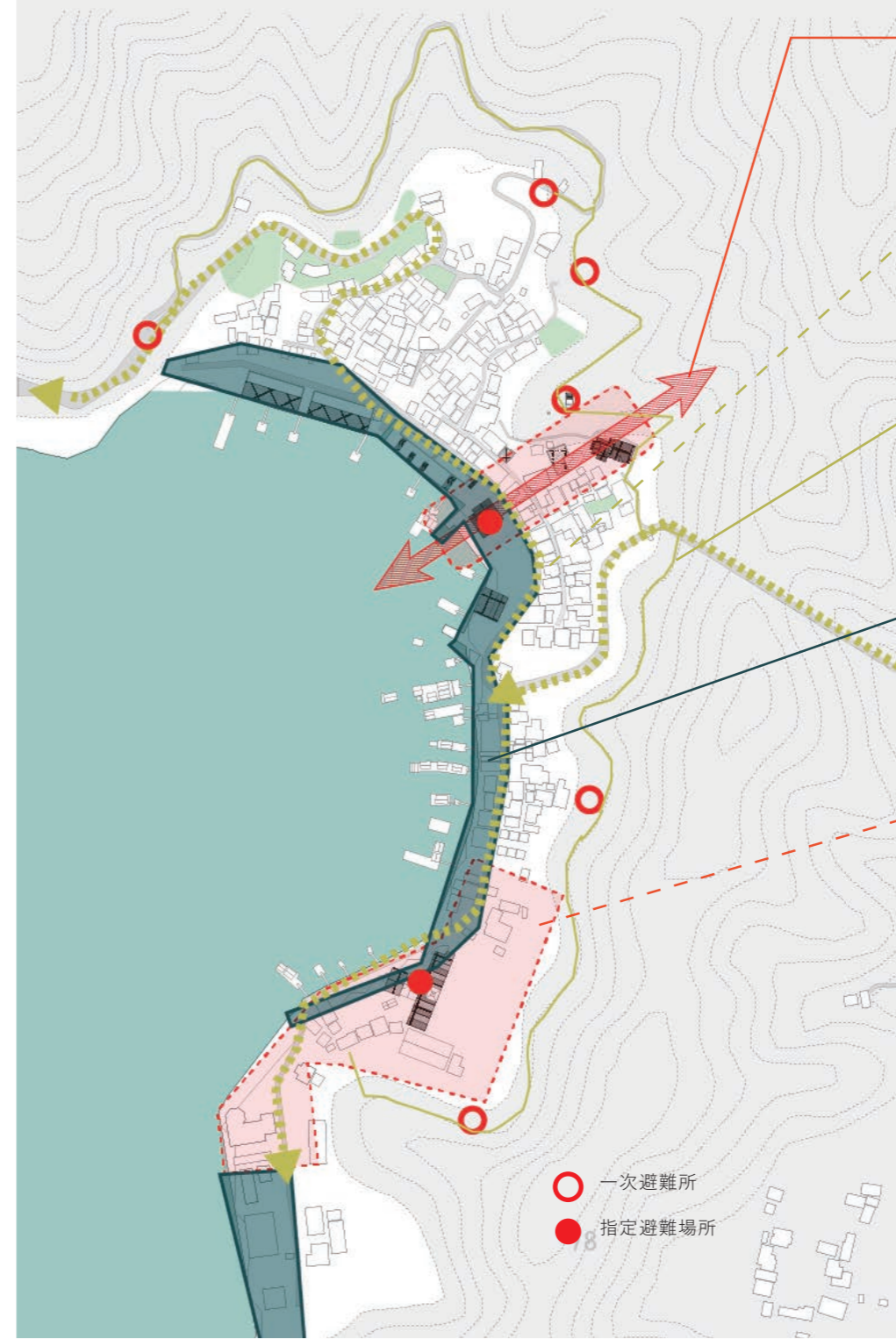
CONTEXT 農村から漁村へ



①農村期 ②農村から漁村への転換 ③漁業の勃興から現在

産業の変遷
主産業の変遷は、集落の形態に大きな影響を与えている。
①農村期
集落の背後の山は段畑として利用されていた。
②農村から漁村への転換
真珠母貝の養殖技術を輸入して依頼、徐々に農業は衰退。
③漁業の勃興から現在
漁業を産業化するために海岸が埋め立てられ、作業場をはじめとした施設が建設される。近年では、公民館が集落の中央に建設された。集落のコンパクト化が進んでいる。

SITE UNDERSTANDING 漁村集落の読み解き



海から山にかけての縦軸
山と海岸の両方に位置する祭礼空間がつくる軸付近に、集落の生活を支える寺・市場・公民館が立地している

海岸線の横軸＝県道
県道は由良半島唯一の陸路であり、家串の場合は埋立て造成された。

山の横軸＝旧農道
段畑が営まれていたところに使われていた農道。整備の度合いは場所によってまちまち。一次避難所をつなぐポテンシャルをもつ

埋めた地
養殖の作業場が立地している。埋め地も建物も自治体が整備。作業場の半分は倉庫として利用されている。南部の海洋センターを育てる重要な施設。

小学校エリア
由良半島中の児童が通う。

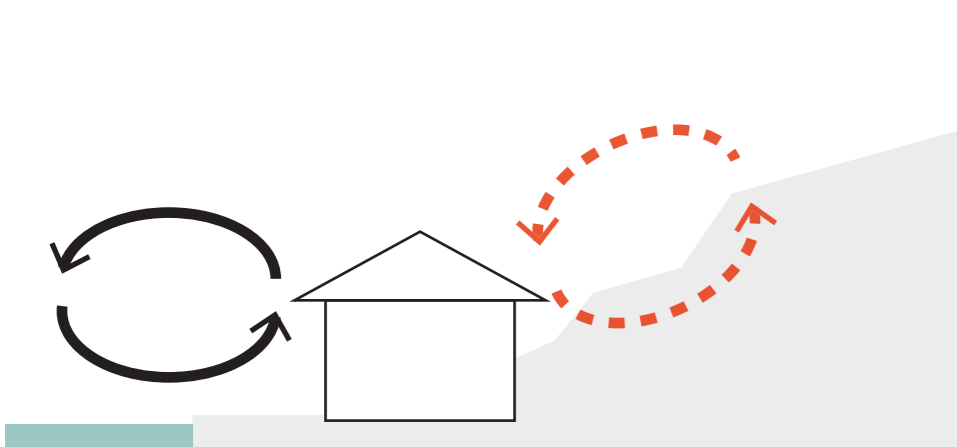


空き家の増加
集落では近年、人口が減少しており、空き家の増加が著しい。また、縦軸の周囲に住宅が密集しているため、住環境としての質が心配される。

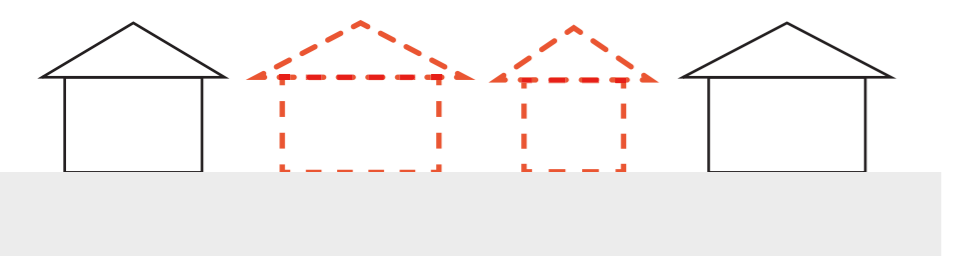
PROPOSAL 「庭」による漁村集落の更新

0. 事前復興の目的

1. 海から山へと連続する「庭」



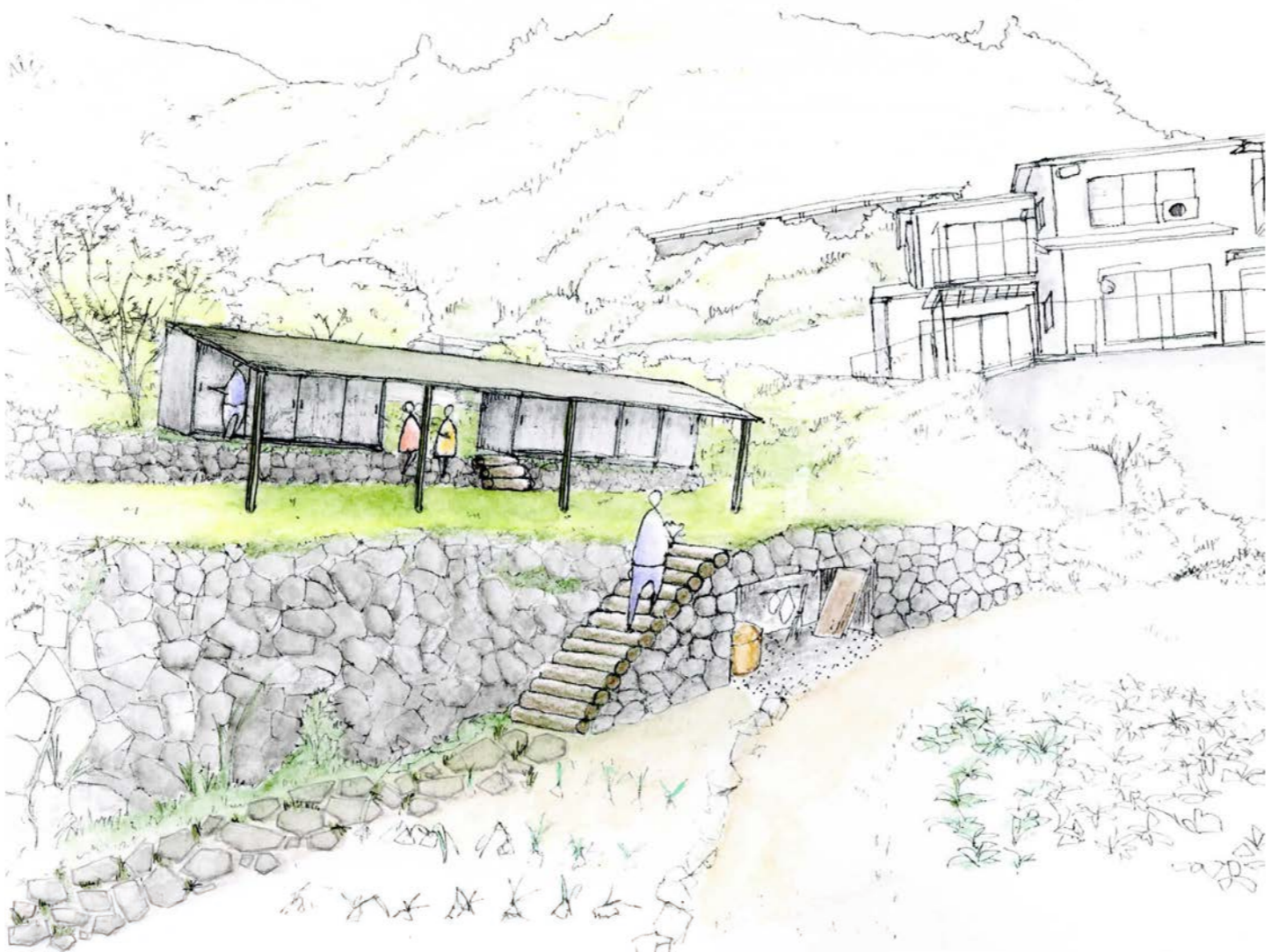
家と山の関係性の修復
津波の被害を最小限に抑えるには背後の山への迅速な避難が不可欠である。しかし、漁業関係者とその家族の1日は家と海岸の作業場の行き来で終わる。日常的に、背後の山へのぼり、旧農道を歩く生活スタイルをデザインする。



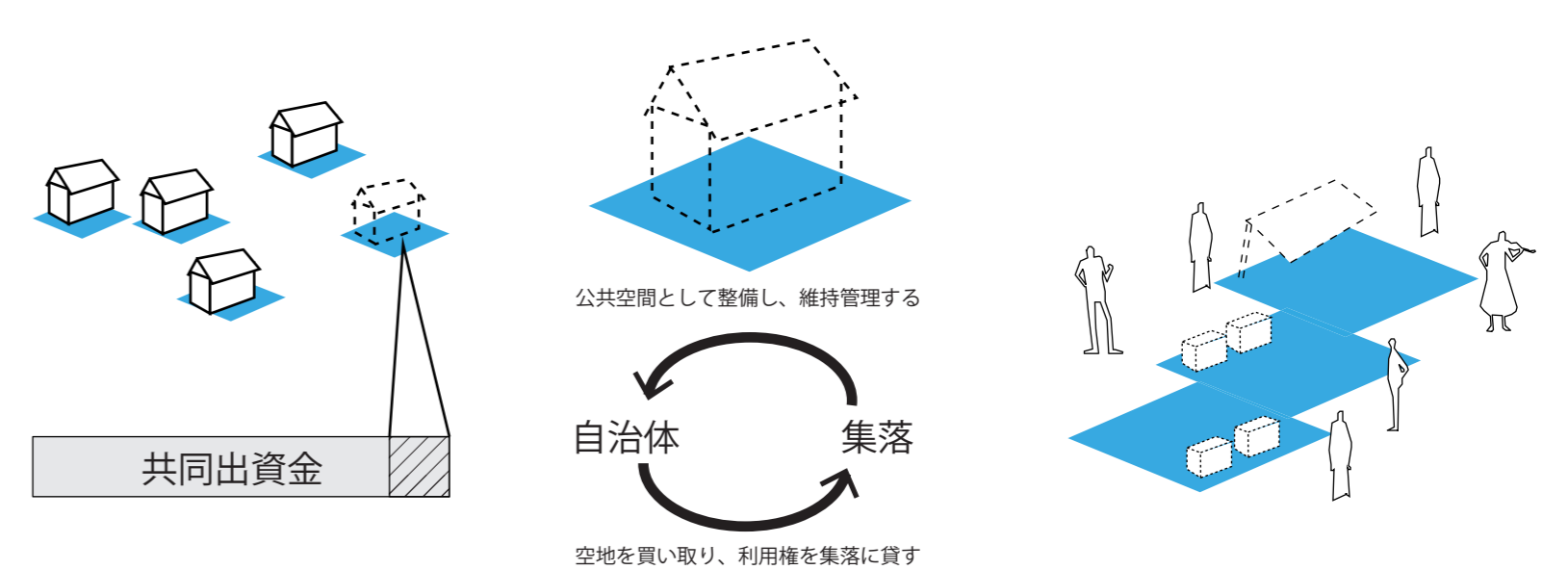
住宅エリアの脆弱性の解消
低平地から山裾にかけて、住宅が密集していて、旧農道へとづく集落内の道は細い。また、集落内には多くの空き家が存在している。空き家の解体によって、集落に「余白」を生み、かつ被災後の物的被害を最小限にする。



瓦礫からつくったタイルをならべて遊歩道をつくる



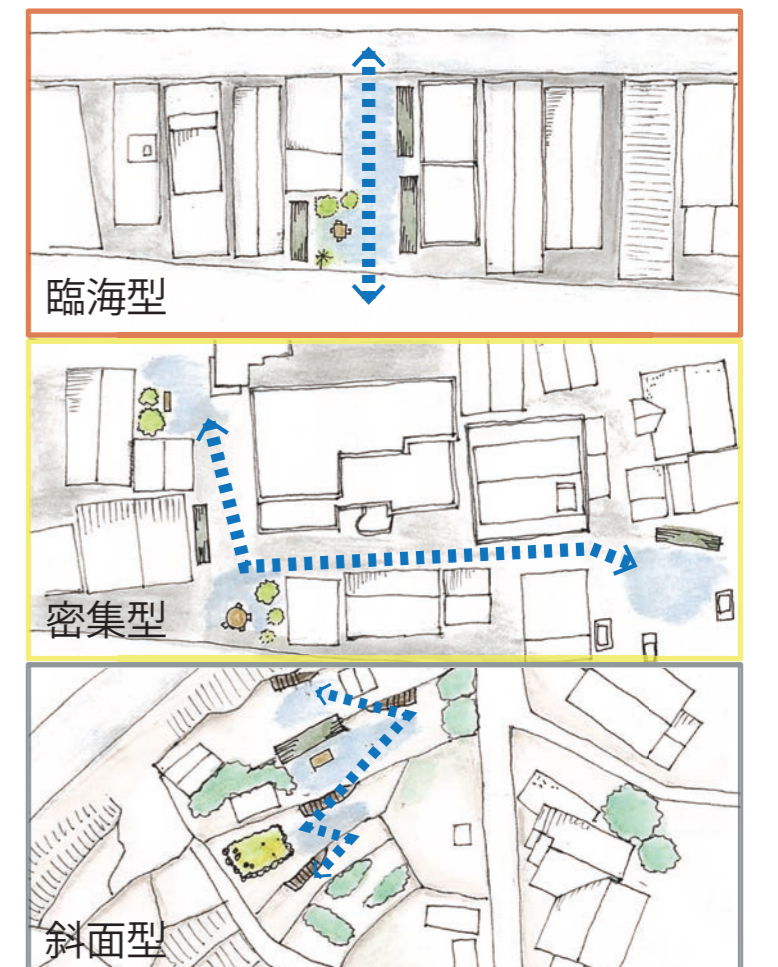
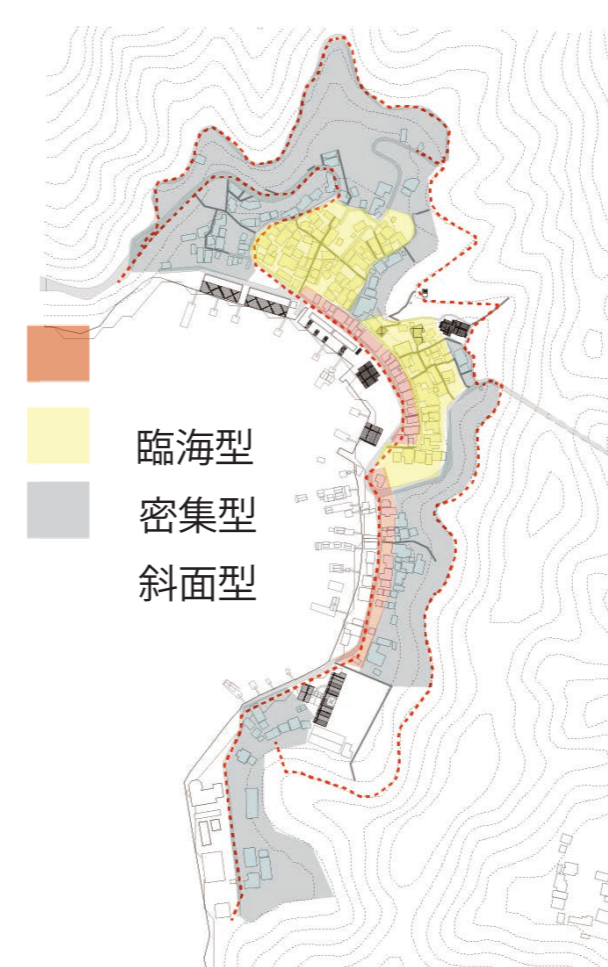
既存の兵や石垣を活かして、上下をつなげる。



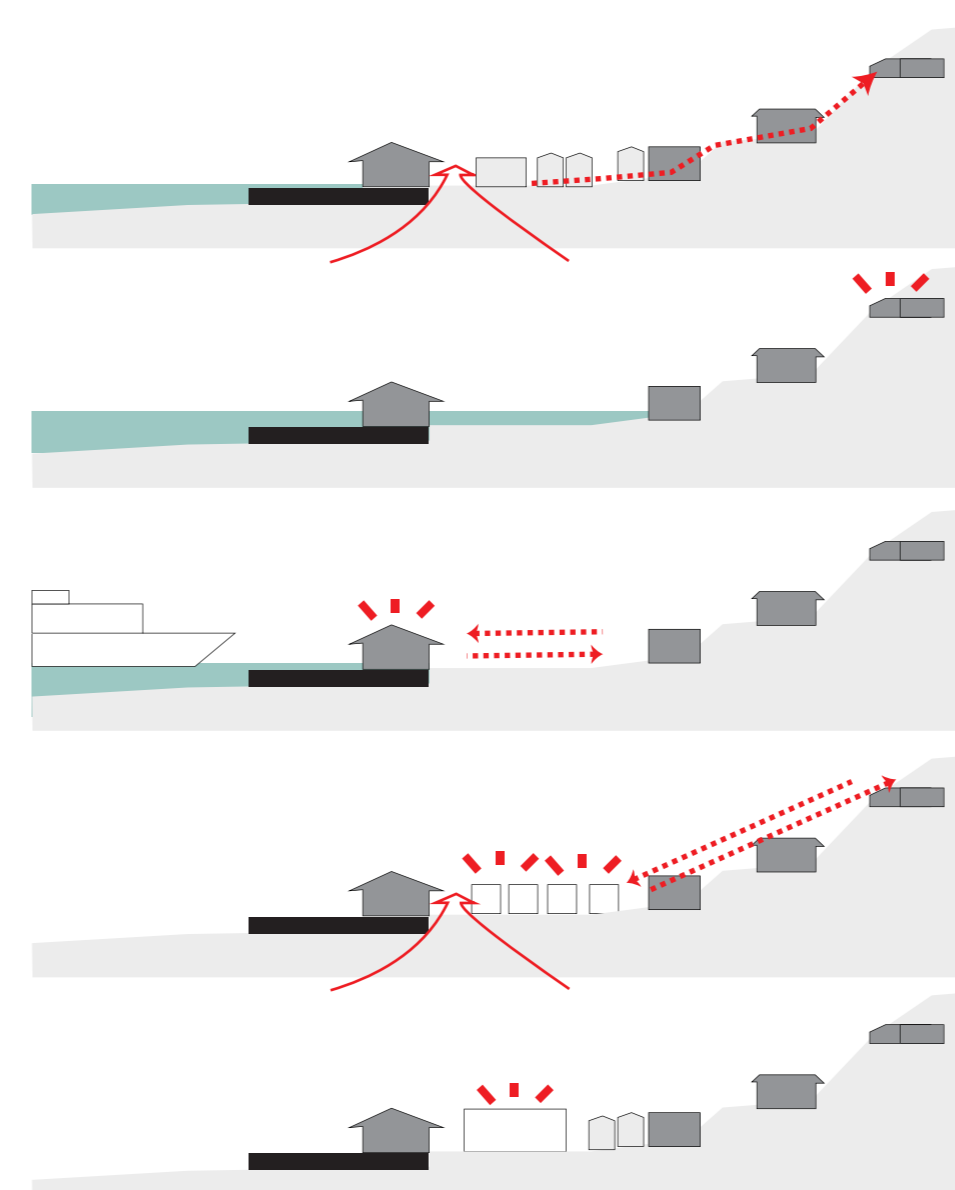
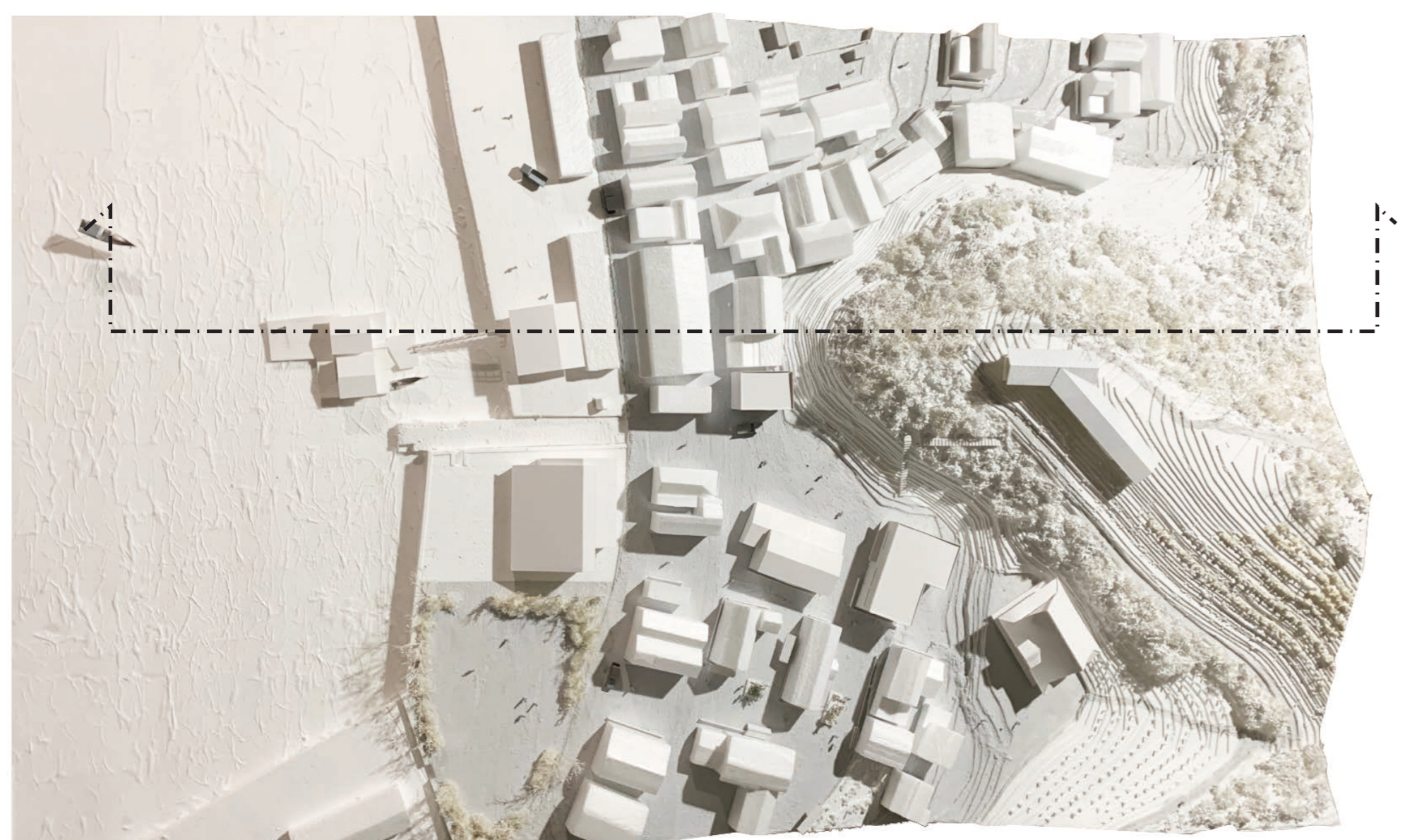
- ①空き家の解体
集落の共同出資をつかって、空き家を解体する。なるべく、解体する空き家の敷地が連続するように順次解体する。でた資材は、整理して管理する。
- ②空地の買い取りと「総有」
空き家を解体してできた空き地は自治体が公有地として買い取る。すべての公有地の利用権を集落に貸し、その代わりに集落全体で日常的に公有地を維持管理する。
- ③公有地の「庭」化
連続する公有地とそれと隣接する道の空間整備を住民たちが行う。歩きやすさを担保するために、解体ででた瓦礫をつかって床を舗装したり、資材でつくったファニチャーをくわえていく。

「庭」化のガイドライン

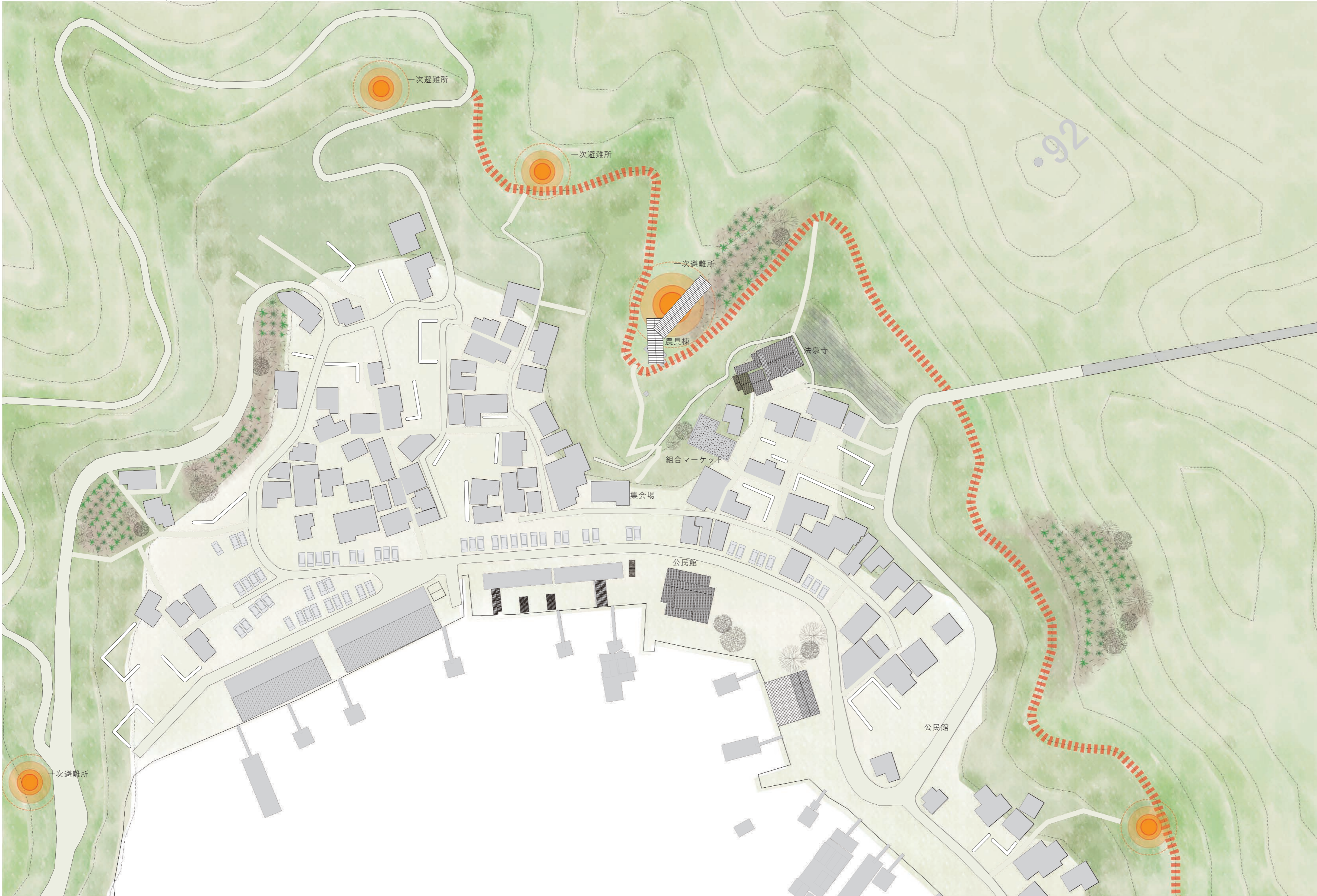
地形や立地にあわせて、動線計画やファニチャーの配置を行う。地面を造成する際は既存の側溝に水が流れるように、傾斜やタイルの敷き方を配慮する。



RECONSTRUCTION SCHEME 「庭」のある復興



1. 津波から逃げる
歩車完全に分離しているため、高齢者をのせて自動車避難しやすい。庭はかつて街区内のショットカットとなる。
2. 救助を待つ
再生された農道をたどって、一次避難所間を移動できる。また、農具棟から海と集落の様子うかがえる。
3. 避難所に住む
道路啓開のための重機を海より運ぶ。「庭」は瓦礫や作業ヤードとして使われる。避難所に住みながら、なるべく自力で復旧する。
4. 仮設住宅に住む
公有地である「庭」に仮設住宅を建設できる。段畑で食糧をとることができる。道路の早期啓開により、他集落の復旧も進む。
5. 集落に戻る
陸の「庭」はまどまった土地であるため、漁業施設の再建がしやすい。再び低地に住宅も再建はじめる。

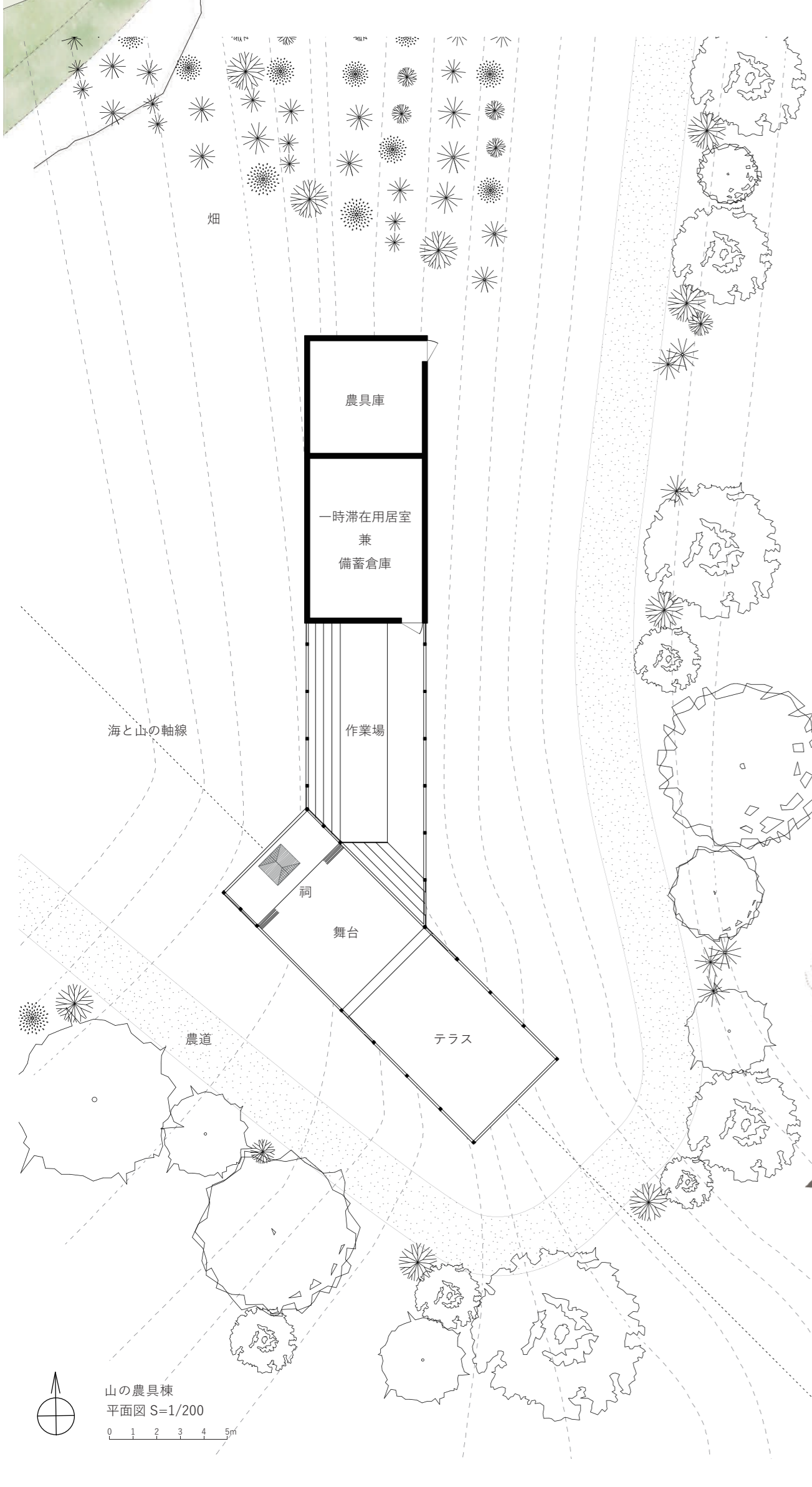


海から集落をのぞむ



連なる「庭」の様子

2. 山の「庭」化 - 農具棟の設計 -



防災機能をもつ農具棟の建設が、段畑の再生のきっかけとなる。段畑が再生することで、日常生活と山が結びつく。集落をのぞめる位置に配置することで、かつての「海へのまなざし」を獲得する。

3. 全体計画



フェーズ1
段畑の再生のきっかけとなる農具棟を建設する。
空き家の分布を確認し、ネットワークの計画を練る。

フェーズ0
空地を「庭」化させていく。県道沿いに駐車場を並べることで、集落内の歩車分離を徹底する。庭と段畑が徐々につながることで、農業や集落内の歩行が日常化していく。

家申マスタープラン S=1.1200
0 100m

「庭」のなかに集落があるような風景。新たな漁村集落のかたち。



山へとつづく「庭」がつくる遊歩道



集落を見守る農具棟

